

2013 年 5 月 27 日（月） 於：大連理工大学外国語センターホール

水田宗子理事長大連理工大学名誉教授授与記念講演
講演タイトル：「人格形成と多文化共生教育・研究」

【水田】 尊敬する張徳祥党書記、寧桂玲副学長、各大学院そして副院長、杜鳳剛先生、蘇敬勤先生、そして尊敬する大連理工大学の先生方、また職員の皆さま、そして学生の皆さん、ただ今は張書記から私に大連理工大学の名誉教授の称号をいただき、そして張書記自らバッジをつけてくださいました。心から光栄に思い、感謝申し上げたいと思います。

また、ただ今は寧副学長から私のご紹介をいただきまして、大変ありがとうございます。“ジャストインチャイニーズ”でしたので、内容はよく分かりませんでしたけれども、実物以上のご紹介をいただいたことを心から感謝申し上げます。また、これに先立ちまして、張党書記には私どもの大学から名誉博士の称号を授与させていただいております。今回、私も称号をいただいたことによりまして、城西大学と大連理工大学が文字通りの姉妹校になったことを、大変うれしく光栄に存じております。

昨日は私ども大連の学友会、城西大学、城西国際大学の学友会を開催いたしました。そしてそこには大連理工大学との連携大学院、また J M B A という管理学院との共同での修士のプログラム、それから向坊隆先生記念の奨学金、また水田三喜男記念奨学金を差し上げた方々、それから城西大学、城西国際大学で学ばれた卒業生の方々、大勢の方々が出席してくださいました。その数は 1500 名以上を超えておりますけれども、昨日も 100 名を超える大勢の方々が、またそのご両親の方々がご出席くださいまして、大連での城西大学の学友会も本当に大きく広がりつつあることを実感し、うれしく思っております。

今回、世界的に高名なこの大連理工大学の名誉教授の称号をいただきましたことを光栄に存じ上げるとともに、心に重く受け止め、これからの私自身の研究と教育に対して、さらなる努力をしていきたいと思っております。どうぞ皆さま、よろしくお願い申し上げます。また本日は、このように私に皆さまに向けて話をする機会をお与えくださいまして、ありがとうございます。

この機会を活用させていただきまして、日ごろ私が考えている大学における人格形成について、少し話をさせていただきたいと思います。今回の講演のテーマは、「人格形成と多文化共生教育・研究」という題を選びました。それは、私は 21 世紀になりましてから、ますます大学教育の核心に大学教育における人間形成にとって多文化共生教育・研究の重要性があるということを、強く感じているこのごろだからでございます。

私が理事長を務めます城西大学の建学の精神は、「学問を通しての人間形成」です。つまりそれは、学問はそれ自体が目的ではなく、人格の陶冶にあるということであります。私は若いころから研究者を目指して勉強してまいりましたので、この城西大学の「学問はそれ自体が目的ではない」という建学の精神には、どこか納得のいかないところがありました。それは学問や研究は真実を求めるものであって、ちょうどエベレストに登頂したヒラリーが、山がそこにあるから登るのだと言ったように、学問それ自体が事実を知る、真実を求めるという、純粋な行為であると考えていたからです。

それからまた人間形成という視点から考えるのだとすれば、人間形成にはさまざまな道があって、何も学問だけが人間形成の道ではありません。人類の歴史には大学教育を受けなくても、また学問をしなくても、人類のために多大な貢献をした人たちがたくさんいます。

私は、人間形成で最も大切なことは経験であると思ってきました。若い時に、それから年を取ってからでも、自分の体で経験し、自分の目で見て、そして自分の頭で考える、そういう機会を与えてくれるのは、取りも直さず経験であって、その経験を通して人格が形成されていくというように考えていました。

また経験にはさまざまなものがあり、必ずしもいい経験だけではなくて、思いがけず被害者になったり、思いがけず人を傷つけてしまう加害者になったり、また歴史の流れの中で意図せずに戦争に巻き込まれてしまったり、またとんでもない惨事を経験するという、人の意図や意思を超えたものがあります。そのことを経験しなければ、人格なるものは形成できないと私は思っていましたし、若い時のアメリカ留学経験からも、それが正しいと考えてきました。

しかし学問が面白くなるにつれて、私は経験だけではないということを次第に知るようになりました。それは経験で学んだ人たちは非常に大きなものを人

間として形成をしていくわけですが、経験だけで物事を見、そして判断してきた人たちには、どこかに自信の強さによる偏りがあり、そして自分の間尺だけで物事を判断していくという大きな欠陥があるということを、次第に感じるようになってきました。

それは、まず第一に、経験には限りがあるということです。人が自分自身で経験することには大変大きな限りがあって、すべてのことを経験することはできません。それからまた経験にはその質というものがあって、どのようなことを経験するか、そしてそこから何を人が学んでいくかということには、これは個人の差が非常に大きく、また環境の差が大変大きい。従って、経験だけに頼っていては、私たちは物事を正しく判断したり、英知、つまり **wisdom** に至る道は限られてしまうのではないかということに思い至るようになりました。

私の研究分野は人文科学で、人間や文化や、それから人間が表現した文学や芸術作品を扱うという、そういった領域ですが、私は次第に学問というのは自分が生きなかった時代、自分が生きることのできない時代、それから自分が経験することのできないこと、会うことのできない人、その人たちの生きた生き方と、その軌跡や足跡を学ぶことが、それを自分で考え返し、自らの内面を形成していくことが学問をするということだということに気が付いてきました。今でもそれを強く信じております。

そしてそのためには、事実を知ることと検証することも大切ですが、何よりも他人を理解し、他人の生きた足跡を尊重し、そして自分が生きなかった時代の文化、それからこれから生きないであろうけれどもこれから来る時代に対する洞察力と理解と、そして他者の感情を感受する想像力。それらを養っていくことが、少なくとも学問をする、大学教育を受けるということの核心ではないかと思います。

学問や研究にも欠陥があり、学問は往々にして科学であることを目指して、検証と実証だけを目指す傾向があります。また他者の生、人間の心を実証するエビデンスなるものは、歴史の中の資料としては大変少ないのです。しかし、21 世紀になって他者を理解し、その心を知ること、そして他文化を知ることとは、人間形成教育の過程として、あるいは学問の研究分野として、さらに大変重要になってきていることを強く感じます。

それはグローバル化、そしてテクノロジーの進展に伴って、文化が非常に急速に、そして大きく変わっていくということのためです。今までは人間が移動することによって、物もお金も情報も、そして文化も移動していました。しかし急速なテクノロジーの進展によって、人間が移動しなくても、物も金も情報も勝手に移動してしまいます。そして、気が付いてみると人間だけが取り残されていて、今までは人間に付随していて、人間がコントロールすることができた、それらの重要な文化をつくっていく要素が独り歩きをしている。そして、人間によってコントロールすることが不可能であるということが分かってきました。

それにもかかわらず、私たちは現在いまだに人種、民族、国という従来的な非常に小さな枠組みと既成の価値観とパラダイムの中で自分たちや他者を考えています。その間に地球は、環境が悪くなり、そして情報がさまざまな紛争や対立を生み出していくという、そういう状況に私たちは直面してしまっているのです。

地球は大変小さくなってきていますので、地球のある一部分を汚染して自分たちだけは汚染しないと思うことは、もう既に妄想でありますし、他者を滅ばして自分たちが生き残れると思うことも、これもまたとんでもない妄想であると思います。人間だけが移動しないで、ほかのものが一瞬にして移動しているという、そういう新しい時代においてこそ、私たちは人間形成の核として異文化を理解し他者と共存をすることを価値と考える、そういう「人格」を育てていくことが、取りも直さず地球と私たちを救い、私たち自身を他者と共に危機から逃れる、その方向を考えさせることができるのだと思います。

21 世紀になって、今もっとも移動しているのは文化です。私たちは、例えば韓国のドラマが中国でもアジア全域でもアメリカでも広く見られていることを知っていますし、村上春樹の小説は日本の小説では既になくて、世界中で読まれている、若い人たちに親しまれている作品であることを知っています。また映画も言葉を超えて既に 1 つの国の映画ではなく、多くの国々で異なった民族や文化は、多くの人たちに見られていることを知っています。音楽はイギリスの音楽であろうと、どこの音楽であろうと、一瞬にして移動し、そして実に多くの人たちを巻き込んでいます。また作品は翻訳やリメイクされて、いろいろ

な国でいろいろな形で作り直されていきます。私たちが移動する以上に、現在は文化が移動している時代なのです。

人間が生きた軌跡や足跡、思想や表現、つまり人間が考えたこと、感じたこと、表現したこと、それが文化だとすれば、その文化すら人間を置き去りにして、勝手にどんどんと移動し伝播していく。そして日本のアニメーションも、作った人が日本人であろうが誰であろうが、世界に大きな影響を与えていく。それがグローバル化時代の特徴的な現象であると思います。私たちは置き去りにされないで、文化についていかなければならないという、そういう時代なのです。

私は大学教育の中に教養課程の重要性をもう一度しっかりと位置付けて、他者の文化、異文化、そしてそれらと共生をしていく、課題を共有していくことを価値とする人間性育成を人間形成教育の核にする教育の過程をしっかりとつくって、これからの 21 世紀、人間だけが置き去りになってしまわない文化をつくる。そのために大学教育が努力をすべきなのではないかと思います。人間は何といいましても自分たちの環境と文化と社会を自分たちの手でつくっていかなければならないのであって、人間が独り置き去りにされている現在の現象は、未来に対して大きな危機であるのかもしれない。

私は学問とは広い意味での経験だと思います。自分たちで経験できないことを、学び、考察し研究をすることによって、自分のものにしていくことは、経験することなのです。そのことが恐らく学問の最も大切なところだと思います。そのためには、私たち教育に携わる者は、まずできる限り若い人たちに異文化に直接触れてもらい、そして異文化の人たちと友人になって、互いに考える。そしてその考えを共有する。そしてそれだけではなく、先生たち、学者たちと共に文化を研究していく、先達である教授たちも勉強し直していく。そういうことを大学教育の核心として、とらえ直していく。そのことによって、私たちは若い人たちに異文化を理解し、愛し、共有することのできる人格をつくる環境と機会を作っていくことができるのではないかと、強く思います。

今回はこのような話をさせていただく機会を与えてくださいまして、大変ありがとうございました。私たち城西大学と高名な大連理工大学が、このように意義深い関係を持つことができ、またたくさんのお友達を学生さんたちの間に

もつくることができた、そのことを大切に思っております。姉妹校同士、学問は広い意味での経験であるということを基盤にしながら、たとえ科学的な実験であろうと、実証や検証であろうと、すべてはやはり人間が生きて、考えて、そして関係をつくっていく、大きな意味での文化ということに収斂されるのだということを私は強く感じております。現代文化にも先を越されてしまった大学教育ですけれども、もう一度学生とともに私たち教員も研究者も文化を理解し直して、そのことをしっかりと自らの教員としての人格形成に役立てていきたいと思っております。

城西大学も城西国際大学も、大連理工大学の輝かしい学問と教育の歴史に、追いついて行かなければなりません、どうかこれから私たちの学生たちも、皆さま方の学生と同じように指導していただけるように、それから大連理工大学の先生方も、私たちとともに未来をつくっていくための良き同志であっていただけるように、心からお願いをしたいと思います。

あらためまして、本当に名誉ある称号をいただきまして、ありがとうございます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

質疑応答—

【司会】　こんなに素晴らしい講演を聞いて、学生の皆さんもきっと非常に勉強になったと思いますが、せっかくのフェース・トゥー・フェースのチャンスですから、質問があったら、どうぞ手を挙げてください。

【質問者 1】　水田宗子先生、こんにちは。先ほど先生の講演を聞いて非常に勉強になりましたが、幾つかの質問がありますがよろしいでしょうか。

【水田】　どうぞ。

【質問者 1】　先ほど先生が言ったような人格形成のことですが、われわれは大学生としての自分の人格形成について、いいご意見とかはないでしょうか。

【水田】　私は 1961 年に、日本からアメリカの大学院に留学をしました。その時、日本はまだ戦後 10 数年しか経っておらず、やっと戦後の荒廃から抜け出てきたというそういう時代で、1 ドルは 360 円、そして日本人は 200 ドルし

か海外に持ち出せない、そういう時代でした。

しかし、振り返ってみますと、私にとってその留学経験は本当に大きなものがありまして、いろいろな問題にぶつかったり考えたり、考えなければいけないこと、決断を示さなければならないことのある時に、帰っていくのはその留学の時代の自分です。日本が世界の中で戦争に負けて、そして多くの方たちの批判を浴び、名誉も失っていた、そういう時代に他国の大学で勉強し、さまざまな考え方をする多くの人たちに出会ったということは、非常に大きなことだったと思います。そういう意味で、私はまず若い時代に異国に行って学び異文化に触れて、自分では理解のできないような他者に出会う。そのことが人間形成にとって大切なことではないかと思います。

留学経験の中で感じたことが2つあります。1つは、人とそれから国との関係についてです。日本は大変貧しくて、そして世界の中で決して尊敬されてはいませんでした。留学生はお金がなくて、苦勞して勉強しなければなりません。世界の中には、日本は悪いことをしたのだから、原爆を落とされるのは当然だと思ふような人がたくさんいて、それは私の心を大変傷つけました。しかし同時に、アメリカには日本の文化が好きで、日本の文化の伝統に大きな尊敬の気持ちを持っている人たちが、たくさんいることを知りました。そして私の面倒を見てくれた多くのさまざまな階級や文化背景の異なる人たちがいて、そういう人たちによって私の留学生活は本当に意味のあるものになったと強く感じました。

もう1つは、私がいくら個人であると思っても、やはり日本人として、あるいは日本としての歴史の重みというのを、どこかで責任と誇りを持たなければならないということなのです。多くの人たちに支えられて私は勉強してきましたけど、それからもう50年、60年たって、さらに私たちは多文化を学んで共生していかなければいけないということを、今更に強く感じる。そういう時代になってきていると思います。皆さんもぜひ留学をしてください。留学ができれば、何らかの形で自らの体を運んで、そして多文化での生活を感じるといふ、そういう経験をぜひ持っていただきたいと思います。参考になったでしょうか。

【質問者1】 ありがとうございます。

【質問者2】 今日わざわざお越しになって、ありがとうございました。機械工学部から来たチョウと申します。今日はありがとうございました。そろそろ卒業しますので、自分の進路を考えると、さっきおっしゃったとおり留学も大切な経験だと思っていますので、目標としては城西大学もすごくいい選択肢だと思っています。もし城西大学に入りたいなら、自分がやるべきことを教えていただければと思っています。

【水田】 もう即ウエルカム。私たちは大連理工大学と、そしてリーダーの張徳祥党書記と私たちの間に非常に強い信頼関係を築いていますし、先ほど申しましたように、共同でダブルディグリーが取れるプログラムを大学院と学部レベルの両方で開発してきております。それから教授方も共同研究をしているし、また学生さんたちの交流も非常に活発に行われています。

また大連市と城西大学、城西国際大学も本当に多くの人材育成のプログラムを持っておりますので、どちらかというところ城西大学にいらっしゃれば、それほど大きな違和感のある環境に行くということはないと思います。しかし、やはり中国と日本は文化が大変違うので、そういう意味で若いあなたが本当に日本のいろいろなところを見る。いいところも悪いところも、あなたと一致しないところも見ると、そして何よりも友人を作り話し合う、共に経験するということが、人間形成には大切なんじゃないでしょうか。しかし、まずは城西大学にいらっしゃい。(笑)

スカラシップもありますし、また城西大学、城西国際大学は中国やアメリカだけではなくて、世界中に100を超える姉妹校があつて、留学生も多様ですし研修プログラムを多く持っていますので、そういうところにも参加する機会があると思います。

【質問者2】 ありがとうございます。(拍手)

【司会】 あらためて、こんなに素晴らしい講演をくださった水田先生に、拍手をお願いします。また、学生のほうから感謝のお花を差し上げたいと思います。(拍手)

【水田】 ありがとうございます。奨学金をうけられた皆さま方、本当におめでとうございます。(拍手)